

2022年度（第31期） 事業報告書

自 2022年（令和4年）4月1日
至 2023年（令和5年）3月31日

公益財団法人 北海道新聞野生生物基金

はじめに

公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、長引く超低金利の下、基本財産運用益は引き続き低水準にあり、寄付金も新型コロナウイルス禍に加えロシアによるウクライナ侵攻に端を発した止まらない諸物価の値上げより厳しい環境が続いている。2021年12月に継続的かつ安定的に寄付金収入を得るため「サポート企業制度（年会費1口・3万円）」を導入した。一般からの寄付金は前年度より64万円減少し、サポート企業の会員企業・個人も20社・87万円減となったものの35社・65口が継続、新規1社・1口の申し込みで198万円の会費収入があったため、前年度比241万円の減額で収まった。

一方、公益目的事業は前期同様、新型コロナウイルスの感染状況をみながらの実施となった。メインの助成事業は一般助成、杉本とき鳥類保護助成を合わせて14団体・個人に総額300万円を助成するなど、北海道の自然と野生生物保護のための事業を展開した。収益事業では、昨年並みの収入を確保した一方、用紙代はじめ諸資材の値上げがあったこともあり、吊り下げ型カレンダーのサイズを一回り小さくするなど経費を圧縮したことで一般会計への繰入額は49万円増額できた。

また、5年に1度開催してきた「北海道フラワーソン」を6月に実施した。財政難のため、今回は全道各地で実施した説明会をオンラインに切り替えるなど経費圧縮に努めた。

寄付金については、税額控除の対象法人取得要件（5年間の年平均で3000円以上寄付の個人・団体が一定数必要）を維持できるよう、今後も一般向けのほか、北海道新聞社の社員・OB、販売所などへの支援の呼びかけ、サポート企業の会員獲得を目指していく。

◇収益事業（特別会計）

*一般販売用カレンダー事業 決算額 389万円（予算額440万円）

「北海道野生生物写真コンテスト」の応募作品の中から秀作を選び、動物部門の大判吊り下げ型と植物部門の卓上型に加え、かわいい動物写真を掲載した中綴じ吊り下げ型のカレンダーを発行した。当基金や書店などを通じて北海道の野生生物を守る目的と願いを込め継続して販売している。公益目的事業に繰り入れる額が337万円と、49万円の増収となった。

◇公益目的事業（一般会計）

【普及啓蒙事業】

*シンポジウム・フォーラム 決算額 33万円（予算額20万円）

6月に道新ホールで自然写真家の山本純一さんを講師に迎えて野生生物保護に関するフォーラムを開催した。支出はホールの備品使用料やチラシ作成費。

【自然体験活動事業】

(1) 自然・環境出前講座 決算額 実績なし(予算額 20 万円)

北海道新聞社との共催で当基金の評議員を中心とする講師を道内各地の学校・団体などからの要請に応え、小中高校や地域学習の場に派遣する事業。2022 年度は要請がなく、実施できなかった。

(2) 自然・環境エクスカーション 決算額 9 万円(予算額 20 万円)

フットパス・ネットワーク北海道主催の「全道フットパスの集い」に共催で加わり、年 2 回の開催を計画したが、昨年度に引き続き支出はなかった。また、道新観光と組んで自然や野生生物に親しむ自然探訪ツアーはコロナ禍で実施を見送ってきたが、山本純一さんを案内役に初めて実施した。このほか、北海道の野生生物を考えるイベントなどの後援や事業も実施されなかった。支出は、自然探訪ツアーへの事務局員同行費と NPO 法人北海道市民環境ネットワーク賛助会員会費。

(3) モーリーの森づくり 決算額 19 万円(予算額 20 万円)

北海道新聞社との共同事業で「モーリーの森づくりⅡ」として植樹地の空知管内栗山町で 2012 年度から行っている。新型コロナの感染拡大で 2019 年に最後の植樹を行い、以降は保育管理のみ実施した。2022 年度で植樹地は借用期限満了となるため、栗山町での事業は終了となった。

【コンテスト事業】

(1) 写真コンテストと写真展 決算額 97 万円(予算額 100 万円)

第 28 回北海道野生生物写真コンテストは、道内外のアマチュア写真家 218 人(前年比 3 人減)から 584 点(同 4 点減)の応募があり、ほぼ前年並みとなった。審査で選ばれた動物部門の入賞 7 点、入選 11 点と植物部門の入賞 3 点、入選 11 点は 11 月 11 日～16 日、富士フィルムフォトサロン札幌で展示したほか、「モーリー通信」2 号で紹介する。

(2) 夏休み自然観察記録コンクール 決算額 16 万円(予算額 20 万円)

第 29 回夏休み自然観察記録コンクール(北海道新聞野生生物基金、北海道自然保護協会、北海道新聞社主催)には、道内 17 小学校から 29 点の応募があった。審査会で選ばれた入賞 7 点と佳作 9 点は 11 月 8 日～13 日に札幌市資料館で、2023 年 1 月 5 日～10 日に札幌市円山動物園で展示した。金賞・銀賞は道新子ども新聞「まなぶん」で紹介し、入賞・入選者は「モーリー通信」2 号にも掲載する。

【出版事業】

*自然情報誌「モーリー通信」の発行 決算額 197万円(予算額 150万円)

モーリーをリニューアルした無料誌「モーリー通信」を7月に発行した。創刊号には直木賞作家である馳星周氏のエッセーや道内で活躍する自然写真家9人を特集し、表紙は山本純一氏の知床のヒグマで飾り、好評だった。予算超過は、用紙代ほか諸資材の値上げと馳氏はじめ特集の自然写真家諸氏が全員、快く執筆を受諾してくれた結果、執筆料がかかった。

【助成事業】

*助成事業 決算額 302万円(予算額 320万円)

道内の自然保護、野生生物保全に尽力している団体・個人の活動を広く応援している。2022年度の一般助成は10団体・個人に200万円、別枠で設けている「杉本とき鳥類保護助成基金」は4団体に100万円を助成した。申請件数は新型コロナの影響で減った前年の反動と思われ、前年より13件多い27件だった。金子正美審査委員長らによる審査会で決定した。助成対象事業の実施期間は原則1年で、年度末に報告書を提出してもらう。

【調査事業】

*フラワーソン 決算額 593万円(予算額 700万円)

5年に1度実施しており、今回が6回目となった「フラワーソン2022」を6月18、19日に開催した。コロナ禍や前回参加者の高齢化などで参加者数減少を心配したが、前回の約3000名からは減ったものの2007年の第3回並み2700名が参加した。調査地区数は前回の529地区から553地区に増え、継続性のあるデータが集まった。因みに花は、夏に咲く花の割合が増えて春に咲く花の割合が減少し、この25年間の温暖化傾向が見てとれた。また、外来種や特定外来生物「セイヨウオオマルハナバチ」の拡大が確認された。調査に先立って実施した参加者やアドバイザー対象の説明会をオンライン開催したこと、そして参加者報告や主要データ以外をホームページに掲載することで最終報告書のページ数を削減したため経費を抑制することができた。

◇その他の事業（一般会計）

(1)パンフレットなどの作成 決算額 5万円(予算額 10万円)

ゆうちょ銀行の振込取扱票1万枚の印刷経費。

(2)ホームページの維持・更新 決算額 11万円(予算額 10万円)

基金の活動を広く宣伝・紹介するほか、助成事業や写真コンテストの応募用紙のダウンロードなど、事業の推進にも役立てている。

(3) HoBiCC での事業 決算額 0 万円 (予算額 10 万円)

HoBiCC (北海道生物多様性保全活動連携支援センター) は北海道環境財団、エネルギー・環境・地質研究所自然環境部と当基金の 3 団体で 2014 年 4 月に設立した。特定外来生物のセイヨウオオマルハナバチの駆除情報をまとめるホームページ「新セイヨウ情勢」を運用しているほか、北洋銀行ほく一基金の北海道生物多様性保全助成制度の事務局を担っている。繰越金があるため、当基金からの拠出は見送った。

(4) 事務用パソコンの購入 (消耗品費—予算外) 決算額 33 万円

予算には計上していなかったが、パソコンの起動やメーカー、ワード等アプリケーションの操作に時間がかかり、事務作業に支障が出ていたため、デスクトップ型パソコンを 2 台更新した。

以 上